

日本のことばとこころ

—いきがい大学「若い世代との交流」—

● 土 屋 博 映

一、はじめに

本原稿は、「いきがい大学蔵校舎」の学生たちを本学に招いて、午前土屋の講義、午後本学学生との討論会を開いたその午前中の講義をまとめたものである。当日は、入試課を中心とした、職員の方々の協力のもと、土屋が中心となって行った。また講義の最初に山田副学長の挨拶をいただいた。無事終了できたことを関係者の皆様方に感謝申し上げる。

午前中の講義は、日本語の歴史と、それに心（思想）がどのように変遷してきたかの概要を講義し、それをふまえて、午後の学生たちとの討論会をおこなった。

二、資料

以下の、1から9までは、配布資料である。

- 1、宇宙の歴史
- 2、人類の歴史
- 3、日本の歴史

奈良時代→平安時代→鎌倉・室町時代→江戸時代→明治時代→大正時代
→昭和・平成時代

- 4、文学史

皇族→貴族→武士→町人→国民

- 5、理念

まこと→あはれ・をかし（もののあはれ）→無常（幽玄）→わび・さび

→いき

6、作品（人物）

万葉集→枕草子・源氏物語→平家物語→方丈記・徒然草→奥の細道→玉勝間

正岡子規・夏目漱石・森鷗外

野口雨情→船村徹・高野公男→星野哲郎→さだまさし→星野富弘

鶴田浩二→石原裕次郎→赤木圭一郎→小林旭→渡哲也→車寅次郎

7、言葉

あはれ・をかし・おもしろし

やさし・なまめかし・こころにくし・うるはし・みやび

ゆかし・なつかし

おとなし・つつまし

めでたし・ありがたし・めづらし

つれづれ・いたづら・わびし・さびし・はかなし

こころもとなし・うしろめたし・おぼつかなし

すく・ほる・ながむ・しのぶ

さはる・やつす・かこつ

五月雨・時雨・村雨・こぬか雨・天気雨

宵待草・しのぶ草・よもぎ・むぐら・忘れ草

8、歌謡曲・演歌・童謡

十五夜お月さん・別れの一本杉・城ヶ島ブルース・無縁坂

9、まとめ

日本のこころ←日本のことば

日本の心は、日本の言葉によって具体化される。昔からある大和魂は、漢才を学び、身につけることによって、理念化されていく。和魂漢才という。「やまとことば」の原点は平安時代で、「やまとごころ」の原点も平安時代と考えておいてよい。(以上資料)

三、冒頭の言葉

以上の資料をふまえて、次のように冒頭の言葉を述べた。

「いきがい大学のみなさん、ごきげんよう、ようこそ跡見に。」

「今日は、『日本のことばとこころ』を学びます。『ことば』は、民族の『こころ』を形成してきました。それを学ぶことによって、日本語と、日本人のあり方について考えよう、というのが本講座の目的です。」

「人生の大先輩である、いきがい大学のみなさんと、後輩である女子大生が、年齢の差を乗り越え、日本語と日本人について、タメで学びます。同じ日本人として、地球人として。」

「午後の討論会に、この講座を活かしながら、異文化コミュニケーションをはかりたいと思います。」

「どうぞよろしく、ごきげんよう。」

四、講義

以下、資料に基づいて、講義を始めた。講義の要点を「 」で示した。

①宇宙の歴史→（資料1頁）

「宇宙はビッグバンより120億年、壮大である。夜空を見てみよう。いかに宇宙は大きいか、いかに個々の人間は小さいかが実感されるだろう。現代人、とくに都会の人間は、それを忘れてしまっている。」

②人類の歴史（資料1頁）

「人類の歴史などは、宇宙の歴史でいえば、本当に微々たるものである。1年にたとえれば、ビッグバンが1月1日午前零時に興ったとして、人類の歴史は12月31日の23時59分59秒前後に始まったにすぎないとか聞いている。しかし、その微々たる人間が宇宙の歴史を解明し(つつある)たのである。それはすべて言葉からはじまったのだ。」

「『猿→猿人→原人→人間』という人類の進化を想定する。それがアフリカから始まった。」

「『アフリカ→エジプト（ナイル川）→メソポタミア（チグリス・ユー

フラテス川・トルコ) →インダス (インダス川) →中国 (黄河) →ヨーロッパ・日本』というふうに人類が地球をたどったと推定してみたい。人類はアフリカからアジア・ヨーロッパへと移動していく。ただし、日本や大多数のヨーロッパへの移動は最後のほうになると考える。こういう大きな目でとらえてみるのも時にはいいものだ。」

③日本の歴史 (資料1頁)

奈良時代→**平安時代**→**鎌倉**・室町時代→江戸時代→**明治時代**→大正時代→**昭和**・平成時代 (資料)

「旧石器時代 (群馬の郷土史家・**相沢忠洋の大発見**) →縄文時代 (南方系の流入) →弥生時代 (北方系の流入) →原日本人 (旧石器+南方+北方と考える) →朝鮮 (帰化人→技術の流入) →中国 (交易→政治・文化・宗教・思想の流入) →奈良時代以前 (旧石器+南方+北方+帰化人+中国という積み重ねで成り立った)

「以上のような過程を経て、大陸との交渉関係を経て成長した日本。奈良時代からは、中国から政治・文化・仏教を受け取ると同時に、文字の学習に励んだ。文字を学ぶことにより、言葉が記載されるようになった。」

「日本の歴史には大きなポイントが4つある。」

「①は平安時代。和魂漢才 (中国に追いつき追いこせ) が当時のキャッチフレーズ。文字 (漢字) の習得や平仮名・片仮名を発明するに至った。

「②は鎌倉時代。西から東に権力が移行 (貴族から武士へ・弥生から縄文へ) したことは、単に勢力地図の変化だけでなく、思想にも及ぶ大変な変化である。」

「③は明治時代。和魂洋才 (西洋に追いつき追いこせ) が当時のキャッチフレーズ。西洋文化の習得やローマ字などを学ぶようになった。ヨーロッパの合理主義といった思想の流入は、鎌倉時代に劣らないほどの大変化をおこした。」

「④は昭和20年。アメリカナイズ（アメリカの模倣）がキャッチフレーズ。何でもアメリカという時代。占領され、アメリカの影響を強く受ける。原爆を落とされたのに、自爆テロもおこらない日本であった。」

「明治が終わって乃木将軍の死によって武士道は終わったとか言われる。」

「一部の軍部が日本をだめにしたと考えられる。植民地政策も原爆を投下されたのも、大部分一部の軍部に責任があると思う。」

④文学史（資料2頁）

皇族→貴族→武士→町人→国民（資料）

「時代の主役は、最初皇族、そこからだんだん身分が低いほうに主役が移り、武士こそが、皇族・貴族と、町人・国民（一般民衆）をつなぐ役割を果たした。それは行動的にも、精神的にも、である。」

「同じ物語文学でも『源氏物語』は貴族の文学だが、『平家物語』は民衆の文学である。」

「日本人の思想に大きな影響を与えた作品の中で、『徒然草（→4頁）』は武士寄りだが、『奥の細道（→5頁）』は民衆寄りと考えられる。」

⑤理念（資料8頁）

まこと→あはれ・をかし（もののあはれ）→無常（幽玄）→わび・さび→いき（資料）

「原日本人は、島国のために、敵対意識が少ないと考えられる。まわりにいる者はみな日本列島の仲間であり、他人ではない、という意識である。この点、ヨーロッパなどとは大変な相違である。」

「したがって、日本人の本質は、第一に寛容的であるといえる。」

「また人情的であり、決して契約的（ビジネス的）ではない。」

「日本のことばや文学（こころ）は、そういった風土に基づくものである。」

「日本の美的理念について考えると、『まこと』は奈良時代、『あはれ・をかし』は平安時代、『無常』は鎌倉時代、『わび』は室町時代、『さび』

『いき』（←→やぼ）は江戸時代、といったふうなことばで代表することができる。」

⑥作品（人物）（資料2頁～5頁）

万葉集→枕草子・源氏物語→平家物語→方丈記・徒然草→奥の細道→玉勝間（資料）

「結局、本来の日本語は特定できない。日本人が中国から、政治・文化を学び、文字を習得し、平仮名・片仮名を発明した時点で、成立したものが、いわゆる本来の『日本語』と考えてよい（しかない）。」

「平安時代中期、藤原摂関政治のころの言葉、『枕草子』『源氏物語』に見られることばを模範とすべき『日本語』と考えてよい（しかない）。これは日本の『古典』にあたる（と呼ばれる）ことばである。」

「平安時代に丁寧語が生まれ、尊敬語・謙譲語とあわせ、敬語が著しく発達したのも日本語の特徴である。敬語は貴族の好みであり、生活にあっていたのである。敬語は世界一の文化・教養と自負してよい。」

『『やまとことば（和語）』は、本来、外国との交わりがない、純日本語のことであるが、それは今いう「訓」にあたる（中国語である漢語は「音」である）。しかし、古典では相当中国語の影響を受けている（言葉どころか、発想・思想にいたるまで）ので、古典（模範とすべき日本語）は、『和語＋漢語』と考えるべきである（しかない）。」

「日本語の歴史は、皇族・貴族がリードしてきた日本語をまず武士がリードするようになり、さらには町人がリードする実力を持つようになる。」

正岡子規・夏目漱石・森鷗外（資料）

「明治時代は、西洋化の波が押し寄せ、日本と日本語に大変化をもたらす。ここで外来語がさかんに流入するようになる。西洋の合理主義は衝撃的だった。文豪はその苦しみの中から作品を完成させていったのである。国民全体に影響を直接与えるところが、古典とは少し異なる。」

「日本語は『和語＋漢語＋外来語』となっていく。文字で言えば、「ひ

らがな＋漢字＋カタカナ」という構成である。」

「明治時代に活躍した文学者には、正岡子規（短歌・俳句の革新。彼の友人には秋山兄弟や南方熊楠がいる）、夏目漱石（イギリス留学）、森鷗外（ドイツ留学）がいる。また、福沢諭吉（アメリカ訪問。長岡藩の河井継之助は友人）、野口英世（アメリカ留学）なども活躍する。」

「いい日本語を知る、いい日本文学を知る、いい日本人を知る、いずれも必要である。言葉の背景には、人間があり、外側には文学があるものだ。」

野口雨情→船村徹・高野公男→星野哲郎→さだまさし→星野富弘(資料)

「野口雨情と高野公男は茨城県の生んだ詩人である。彼らには美しい友情があった。星野哲郎やさだまさしには、日本人の、日本文学がはぐくんだ日本の心が残っている。日本の心は、昭和30年ころまでは、しっかり残っていた（たとえば「三丁目の夕日」などをみればわかる）。戦後生まれが成人したころから、アメリカナイズが浸透してくるのである。」

「野球選手も江川あたりから変わってくる。無理はしない。野球はビジネスだという感覚。」

「日本人の心を伝えようとする人も少くない。たとえば、前述の「船村徹（栃木県）高野公男（茨城県）さだまさし（「無縁坂」）星野富弘（群馬県）。」

鶴田浩二→石原裕次郎→赤木圭一郎→小林旭→渡哲也→車寅次郎(資料)

「英雄は『流れ者』である。古来、貴種流離譚、と呼ばれ、在原業平、源義経（判官びいき）、などは人々のあこがれであった。西行・芭蕉（370万歩の男）はその系統にあたる文人である。鶴田浩二以下のスターも流れ者であった。日本人の心には、「流れ者」と「わび・さび」へのあこがれが根強く残っている。

⑦言葉（資料3頁～5頁・7頁〈参考資料〉）

「現代日本語は、長い歴史の中で、様々な変遷をとげている。その中

で、死語とならず、現代まで生き残っている言葉は数多い。そういう言葉に注目し、その個性を見抜く。それが日本人のこころを知るのにつながる。『言葉を学ぶことは、心を学ぶこと』である。」

☆あはれ・をかし・おもしろし（資料）

「『あはれ』は『源氏物語』（もののあはれ）、『をかし』は『枕草子』を代表する言葉。それらを『おもしろし』（おもしろい）と比較してみる。『あはれ』『おかしい』『おもしろい』という現代語の比較もしてみる。」

☆やさし・なまめかし・こころにくし・うるはし・みやび（資料）

「『やさし』『なまめかし』『こころにくし』『うるはし』は、上品で美しいイメージ。『みやび』は『伊勢物語』を代表する言葉とされている。」

☆ゆかし・なつかし（資料）

「『ゆかし』（「行く」からの成立）『なつかし』（「なつく」からの成立）は、心引かれる、という意味である。『奥ゆかしい』が現代語として残る。」

☆おとなし・つつまし（資料）

「『大人し』（大人っぽい）『包まし』（遠慮深い）が語源。漢字に注目すると語源がわかる。」

☆めでたし・ありがたし・めづらし（資料）

「『めでたい』（『めでる』との関連）『ありがたい』（『ありがとう』との関連）。『ありがたい』は『有り難し』が語源である。『めづらし』は『めでたし』と語源が同じである。」

☆つれづれ・いたづら・わびし・さびし・はかなし（資料）

「『つれづれ』は今でも歌詞に使われる（『寂しさのつれづれに』など）。『いたづら』は今でも『いたづらに時を過す』。『わびし』は『わびしい』（思うように物事がはかどらずつらくてやりきれないという感じで、今の『わびる』と関係がある。昔は『わびる』は『わぶ』〈悩む・困る・落ちぶれる〉であった）『さびし』は『さびしい』（本来の生氣や活気が

失われてひっそりとしたさまで、今の『さびる』と関係がある。『さびる』は昔『さぶ』〈気持ち荒れすさむ・古びる・あせる〉であった。『はかなし』は、今は「はかない人生」となどと使われる。『はかばかしくない・はかどる・はかがゆく』などが関連語である。」

☆ころもとなし・うしろめたし・おぼつかなし（資料）

「以上三語については、『ころもとなし』（実現が不明確な不安感）『うしろめたし』（見えない点がわからない不安感）『おぼつかない』（事態が不明確な不安感）など、現代語として立派に生き残っている。」

☆すく・ほる・ながむ・しのぶ（資料）

「以上の語は、『すいとる』（九州弁・異性に熱中する）『ほれる』（本心を失う）『ながめる』（物思いに沈む）『しのぶ』（忍ぶ→こらえる・絶える。偲ぶ・しのぶ→恋慕う）の形で、現代語に存在する。」

☆さはる・やつす・かこつ（資料）

「以上の語は、『さしさわる』『身をやつして』などの形で存在する。『かこち顔』（嘆き顔）は、なかなか語感のよい言葉である。」

☆五月雨・時雨・村雨・こぬか雨・天気雨（資料）

「雨もこんな雨ならムードがある。『さみだれ』は梅雨。『五月晴れ』は、本来、梅雨の晴れ間。『時雨』は通り雨（秋の末から冬の初め）、『北山時雨』は、京都の冬に降る雨、時にちらつく雪もさすことがある。『時雨月』とは陰暦10月のこと。『村雨』は、一頻り強く降る雨（群れになって降る雨・にわか雨）のことで、『驟雨』（しゅうう・にわか雨）とも言う。」

☆宵待草・しのぶ草・よもぎ・むぐら・わすれ草（資料）

「草の名称には優雅なものが沢山ある。『宵待ち草』（おおまつよい草→竹久夢二）は『月見草』と似ている。『しのぶ』草（わすれ草）は『忍ぶ（こらえる）』『偲ぶ（なつかしむ）』。『蓬』『葎』『浅茅』は、雑草の代表。

☆望月・十六夜・立ち待ち・居待ち・寝待ち・臥し待ち（参考）

『月の名称もしゃれている。『望月』（十五夜・みち月からの成立か）。『十六夜（いざよい）』は、ためらうように出てくる。『立ち待ち』（17日）は、立ったまま待つ。『居待ち』（18日）は、座って待つ。『寝待ち（臥し待ち）』（19日）は、寝て待つ。

⑧歌謡曲・演歌・童謡（参考）

十五夜お月さん・別れの一本杉・城ヶ島ブルース・無縁坂（資料）

「歌謡曲はいい。前にあげて船村徹さんたちの歌は、日本人の心がこめられている。

野口雨情さんのものいい。「十五夜お月さん」など感動ものである。

『雨降りお月さん雲の上 お嫁に行く時ゃ誰と行く 一人で唐傘さして行く

唐傘ない時ゃ誰と行く しゃらしゃらしゃんしゃん 鈴つけた

お馬に揺られて 濡れてゆく』

『赤い靴 はいてた 女の子 異人さんに 連れられて 行っちゃった』

『シャボン玉とんだ 屋根までとんだ 屋根までとんで こわれて消えた

風風吹くな シャボン玉とばそ』

五、終わりに

日本のこころ←日本のことば

日本の心は、日本の言葉によって具体化される。昔からある大和魂は、漢才を学び、身につけることによって、理念化されていく。和魂漢才という。「やまとことば」の原点は平安時代で、「やまとごころ」の原点も平安時代と考えてよい。（資料）

「日本の心は、日本の言葉によって具体化される。言葉なきところに心は存在しない。昔からある大和魂（やまとことば）は、漢才（漢語→漢籍→『論語』）を学び、身につけることによって、理念化されていく。

和魂漢才という。模範とすべき『日本語』の原点は平安時代で、模範とすべき『日本の心』の原点も平安時代と考えておいてよい。

「また仏教についても忘れてはならない。日本人の心に『無常』を初め、大きな思想をもたらした。『花は桜木 人は武士』という言葉も、『桜木』と『武士』のいさぎよく散るところを意味している。」

「現在の我々日本人にとって必要なのは、伝統を忘れてはならない、ということだ。過去を学ぶことは、現在の位置づけをすることで、未来のあり方を予測することにつながる。そういう意味で、『日本史』を学ぶ意義は大きい（世界史よりも）。また、日本人の心は、『日本史』の事実を指すのではない。日本史を動かしてきたエネルギーを指すのである。そのエネルギーは、文学（思想）にこそ見出すことができる。」

「『源氏物語』が平安時代の貴族の苦悩と喜びを表すように、『枕草子』は衰退していく主人の定子の様子を見るにみかねて理想的な姿を描いたように。文学作品は作者の叫びであり、それは結局時代の叫びなのである。」

「だから、『文学史』を見直すことも、『文学作品』を見つめることも日本人の生き方を知るために必要なことなのである。身体が遺伝（と環境）から成立するように、精神も遺伝（と環境）から成り立っている。その原点にあるのが『ことば』なのである。日本人が昔から愛してきたことば（うつくしいことば）と文学を簡単に捨ててはならない。」

「文学を軽視する風潮には我慢ならない。人はパンのみによって生きるにあらずという。千利休の秀吉との対決は、究極のところ、心か物かであり、利休は死んで、秀吉に勝ったのである。星野富弘は『命よりも大切なものがあると知った時、生きるのが楽しくなった』と言っている。」

「『うつくしいことば』には『含み』がある。イメージの広がりがある。『含み』こそ、歴史と伝統に培われた、古語のみに許される価値である。そういう言葉を使用することにより、心にも広がり生まれ、人間的にも成長するのである。」

『もののあはれ』は『源氏物語』の本質を表すという。よい言葉だ。聞いただけで心にじーんとくる。『しみじみとした人生の味わい』が、『源氏物語』にはあるという。それを発見したのは本居宣長である。彼は、『源氏物語』における『不倫』を認めた。というより、江戸時代の価値観でもって、平安文学を『不倫』などと規定してはいけない、というのである。短絡的な人間、歴史も文学も重んじないような、言ってみれば、黒か白かでないと気がすまないような、やくざ的な人間にはこの考えが理解できるわけがない。」

「たとえば、『もののあはれ』という言葉の一つ覚え、その本質に触れるだけでも、確実に『日本人のこころ』が伝わってくる。『ことば』には、そのような歴史的背景、文化・教養がひそんでいるのである。これを『ことだま』と言うとしよう。」

「我々は、この『ことだま』を知り、未来へと伝えていく義務がある。それこそが『ことばの重要性』というものであろう。」